

中世前期の春日社・興福寺と南都陰陽師

赤澤春彦

Relationship between Kasuga Shrine/Kofuku-ji Temple and Nanto Onmyoji in the Early Middle Ages of Japan

AKAZAWA Haruhiko

はじめに

① 南都陰陽師の研究史

② 鎌倉期の南都陰陽師

③ 南都陰陽師の活動

おわりに

【論文要旨】

本稿は中世前期の南都陰陽師について検討したものである。南都には中世後期から近世にかけて賀茂氏の庶流である幸徳井家が定住していたことがよく知られている。同家は初代友幸以降、大乘院門跡と密接な関係を結ぶことによって三位に昇進し、賀茂氏の嫡流勘解由小路家の断絶以降、賀茂氏を代表する存在となった。しかし、南都陰陽師の嚆矢は幸徳井家ではない。すでに十三世紀の段階で興福寺には安倍氏の庶流陰陽師である安倍時資・晴泰が興福寺の「寺住陰陽師」として確認できるのである。彼らは南都に定住し、興福寺や春日社で発生した怪異に対する占筮や呪術を担い、造作の日次勘申を行っていた。ただ、そのすべてを取り扱っていたのではなく、国家行事や藤原氏氏長者に関する日次勘申は在京の官人陰陽師が行い、南都陰陽師は寺社内部に関する事柄を扱っていた。また、怪異が発生した場合も軽事は南都陰陽師が吉凶を占い、それが重事と判断されると京へ注進するといったような分業体制が取られていた。興福寺や春日社では頻発する怪異や寺社内部の活動が細分化されてゆく状況に迅速に対処するため、近辺に陰陽師を定住させたと考えられる。これら十三世紀から

確認できる南都陰陽師には二つの系統がある。一つは安倍氏庶流晴道党の晴泰、晴氏の系統、もう一つは安倍氏嫡流泰親流から分かれた時資、資朝の系統である。ただし、留意しておきたいのは、前者は複数の系図に確認できるのに対して、後者は「陰陽家系図」（宮内庁書陵部所蔵）にしか確認できない点である。また、同系図によれば時資の子孫が幸徳井友幸の先祖に当たるというが、傍注に明らかな事実誤認が複数確認できることから、後世の作為とみるのが妥当だろう。さらに吉川家文書（国立歴史民俗博物館所蔵）の「陰陽雑書写」から、時資らの先祖の本姓が惟宗氏であることが推察される。すなわち、幸徳井家はもともと惟宗氏であり、それが十三世紀の段階で安倍氏を名乗るようになり、十五世紀に賀茂氏へ改姓するのである。このように十五世紀に南都陰陽師として登場する幸徳井家は十三世紀の南都陰陽師安倍時資らの存在を前提としたものであったのである。

【キーワード】 南都陰陽師、春日社、興福寺、摂関家、幸徳井家、安倍氏

はじめに

中世後期から近世にかけて南都には陰陽家賀茂氏の一族である幸徳井家が定住していたことはよく知られている（渡辺一九七六、吉田一九九二）。友幸を初代とする同家は大乗院門跡に仕えて三位に昇進し、友景から三代にわたり陰陽頭を務め、勘解由小路家が断絶した後、賀茂氏の主流となった。これらの経緯や南都における活動内容についてはすでに先行研究で詳細に検討されている。本稿で取り上げるのは、幸徳井家が成立する十五世紀以降ではなく、それ以前の南都陰陽師についてである。遅くとも十三世紀には陰陽家安倍氏の庶流が「寺住陰陽師」として定住していた。この事実は先学でも指摘されているが、その活動内容や彼らがなぜ南都に定住したのかについてはなお検討の余地がある。本稿ではこうした課題について改めて史料に基づいて検討した上で、中世後期の幸徳井家にどのように接続するのかを考えてみたい。

① 南都陰陽師の研究史

中世後期から近世初期の幸徳井家については林淳氏、木村純子氏の研究に詳しい〔林二〇〇二、木村二〇〇二、二〇〇六、二〇一二〕。その成果をもとに、まずは幸徳井家の成立と活動内容について確認しておこう。

（一）幸徳井友幸と幸徳井家の成立

幸徳井家は賀茂氏の庶流周平流の末裔友幸を祖とする官人陰陽師の一族である。ただし、友幸は安倍氏嫡流泰親流の傍流に属する友氏の次子であり、もとは安倍氏であったという。明徳二年（一三九一）に友幸が生を受けてからの経歴を「幸徳井系図」^{〔1〕}からまとめると表1のように

表 1 幸徳井友幸の履歴（「幸徳井系図」より）

明徳 2 年（1391）		出生
応永 25 年（1418）	8/7	修理亮 友徳から友幸に改名
26 年（1419）		賀茂定弘の養子（弟子）となる 賀茂氏に改姓
30 年（1423）	10/25	上洛
	10/28	義兄秀康とともに仙洞御祈禱衆として出仕
	10/29	従五位下、遠江守
永享 11 年（1439）	12/18	正五位下
嘉吉 2 年（1442）	4/22	従四位下
文安元年（1444）	4/10	修理権大夫
享徳元年（1452）	8/17	正四位下
2 年（1453）	7/16	従三位
寛正 4 年（1463）	1/28	正三位
文明 5 年（1473）		死去（83 才）

なる（幸徳井家および南都陰陽師の系図は後掲の図1を参照）。友幸は応永二十六年（一四一九）に賀茂定弘の弟子となり、賀茂氏に改姓する。定弘は友幸と同じ周平流に属し、朝廷の陰陽道公事や造暦の一翼を担う官人陰陽師であり、「五条陰陽師」と称されたように京五条に屋敷を構える在京陰陽師であった。友幸は賀茂氏に改姓した四年後に上洛し、義兄秀康とともに仙洞御祈禱衆として出仕した。その後、永享八年（一四三六）年頃までに南都に帰住し、南都陰陽師として活動を開始したようである。^{〔3〕}

南都における友幸の居住地は、享保二十年（一七三五）に村井古道が著した地誌『奈良坊目拙解』から高畠幸村吉備塚辺と野田であったことがうかがえる。⁽⁴⁾野田に住していたことは「陰陽家系図」⁽⁵⁾に載る友幸の傍注に「後小松院御宇初而改氏、賀茂氏ニ被_レ成者也、五条三位定弘依_二弟子_一被_レ任_二賀茂_一畢、此次亦高畠住居」とあり、さらに大乗院門跡経覚が友幸を「野田友幸」⁽⁶⁾と呼んでいることから確認できる。

（二）中近世移行期における幸徳井家と大乗院門跡

友幸は南都に帰住以降、大乗院門跡（経覚―尋尊）との関係を深めてゆく。林淳氏は『大乗院寺社雑事記』『経覚私要鈔』から彼らの活動内容を、a 日次勘申、b 星供の勤修、c 荒神祓の勤修、d 六月晦の夏越祓の勤修、e 新暦や八卦の献上、f 一言主社の神官としての役割、g 心経会の祭師、h 死穢の除服祓の執行、i 未来に対する占い、の九点にまとめている（林二〇〇二）。とりわけaとdを尋尊の代に追加してさらに関係を深めたことにより、尋尊の「申御沙汰」を得た友幸・友重父子は正三位に昇進し、これ以降、『大乗院寺社雑事記』には「幸徳井三位」と記されるようになる。木村純子氏によれば大乗院側が「幸徳井三位」と称する背景には「京都陰陽師」に対する「南都陰陽師」の意識があったという（木村二〇一二）。つまり、友幸は尋尊に積極的に奉仕することで自家の資格の上昇を狙い、一方の尋尊も友幸を「南都陰陽師」として抱え込む意志があり、両者の利害が一致した結果、幸徳井家は南都に勢力を築くことができたのである。ただし、幸徳井家の三位昇進は『公卿補任』には見られない点は注意しておきたい。これは京において幸徳井家が認知されていなかったことを示すと思われるが、幸いにしてこれが同家が中近世移行期の動乱を生き抜く要因となった。

室町期の陰陽家は十一世紀中頃から陰陽道を管掌する賀茂・安倍氏によって引き続き取りまとめられていたが、両氏の宗家として確立する勘

解由小路家（賀茂氏）と土御門家（安倍氏）は公卿に昇進し、陰陽家の身分的な繁栄期に到達する（柳原一九八八）。しかし、応仁の乱以降、土御門家・勘解由小路家は没落の一途をたどる。勘解由小路家は嫡流が断絶し、土御門家は所領名田庄へ下向し、後に帰京を果たすも土御門久脩は豊臣秀吉の勘気を蒙り逼塞する。その一方で大乗院門跡に仕えて存続していた幸徳井家は土御門家・勘解由小路家の退潮により、近世には陰陽頭に就任した。このように中世後期の幸徳井家の動向を考える上で門跡（とりわけ尋尊）との関係が重要な位置を占める。また、南都という地理的条件も加味する必要がある。

秀吉の死後、土御門久脩は慶長五年（一六〇〇）に再び出仕し、同年に家康の昵懇衆となった。久脩は家康が將軍宣下を受けた際に身固と天曹地府祭を奉仕するなど徳川家に急接近してゆく。久脩の子泰重は元和四年（一六一八）に後水尾天皇の許しを得て陰陽頭と暦道を幸徳井友景に委譲し、友景から友種、友傳へと陰陽頭が引き継がれた。しかし、寛文五年（一六六五）の「諸社禰宜神主法度」に危機感を募らせた土御門家は配下の編成を開始し、同十年に南都の声聞師に免許状を与えたため、これに幸徳井家が反発し、法皇・天皇を巻き込む相論へと発展した。この相論の結果は天和二年（一六八二）に幸徳井友傳が死去し、翌三年に土御門泰福が陰陽頭に就任したことで決着がつき、土御門家による陰陽師支配が幕府に認可されることになった。土御門家と幸徳井家の相論について、林氏は陰陽師と声聞師との社会的区分をめぐる認識の相違が反映されていたと指摘する（林二〇〇二）。土御門家が地域の宗教者の社会的区分を越えて「陰陽師」を再定義し、諸国の陰陽師支配を進めてゆく画期となったのがこの事件であった。その後、幸徳井家は土御門家のもとで陰陽助を務める家として存続してゆくことになる。

②鎌倉期の南都陰陽師

それでは本稿の主題に入ろう。木村純子氏によれば、南都には幸徳井友幸以前の十三世紀前半段階から興福寺に仕える陰陽師が存在したという〔木村二〇〇二〕。ところがそれは賀茂氏ではなく安倍氏の庶流であった。そしてこのうちの安倍時資の系統が幸徳井友幸につながることを「陰陽家系図」〔7〕から確認している。彼らの南都定住は同時期に多数の安倍氏が鎌倉に下向した動向にうながされたもので、こうした安倍氏の末流に幸徳井家の成立を位置づけている。ただし、彼らの具体的な活動内容や南都における立場についてはなお検討する余地が残されている。さらに注意しておきたいのは「陰陽家系図」の史料性格である。これは近世に成立したもののだが、時資を嫡流の安倍泰親流に位置づける。しかし、管見の限りこの記載は他の系図類には一切見られず、かつ傍注には明らかに年代が矛盾する記述が複数あり、作為を感じさせる。とはいえ、同系図を単純に史料価値が低いものとみなすのは早計だろう。むしろ、ここに時資の系統が安倍氏の傍流として書き連ねられた意味を考えるべきである。この点は幸徳井家の成立について再考する上でも大きな意味を持つだろう。

（一）興福寺「寺住陰陽師」の登場

それでは幸徳井家以前の南都陰陽師について史料に基づき検討を進めていこう。

【史料1】『中臣祐定記』寛喜四年六月九日条、十一日条（『春日社記録』1巻）

九日、若宮拝屋^ニ野牛参立、番神人許^ニ預^ニ置^ニ之^一、可^レ依^ニ十一日之評定^一申^レ之、

十一日、御神事如^レ例、新神主之外社司皆参、春季御供備進、若宮

役祐定、権官祐公、氏人祐基、拝屋参立牛申^ニ合大社^一之処、可^レ履事ハ決定也、但本主時資陰陽師也、可^レ賜^レ彼敷之由申^レ之、祐定於^レ有^レ祓者、返^ニ本主^一者罪科分無^レ之、然者於^ニ御前^一可^ニ取搜^一之由申^レ之天、時資・晴泰之間、任^ニ神慮^一之処、可^レ給^ニ晴泰^一之由取^レ之、仍以^ニ陰陽少允晴泰^一遂^ニ祓畢^一、兩人寺住陰陽師也（傍線部は筆者、以下同じ）

【史料2】『春日清祓記』（『大日本史料』五ノ八）

一、寛喜四年六月九日、若宮拝屋野牛^{黒毛}参立、預^ニ置番神人許^一、期十一日旬参之評定

同十一日申合「^一」之処、可^レ負^レ祓之由評定、但彼牛陰陽助時資牛云々、同者可^レ賜^ニ彼時資^一之由社司申^レ之、而祐定賜^ニ本主^一之条者、非^レ行^ニ過怠^一歟、然者可^ニ取搜^一之由申^レ天、於^ニ御前^一取搜之処、可^レ賜^ニ晴泰^一之由取^レ之、仍陰陽少允晴泰^ニ賜^レ之了、

寛喜四年（一二三二）六月九日、春日社若宮の拝殿に野牛が入り込む事件が起きた。神域に動物が闖入することは怪異の顕れであるため、十一日に評定が行われることになった。評定には記主中臣祐定ら若宮の社司が集まり、対応を協議したところ、牛は陰陽師安倍時資のもので、時資に牛を返して祓をさせるべしとの意見が出た。しかし、祐定がこれに反対したため、祓の執行者を時資か安倍晴泰にするか神前で籤を引いて決めることにした。その結果、晴泰に牛を下賜して祓をさせることになった。以上が事件の経緯である。

注目すべきは史料1の傍線部「兩人寺住陰陽師也」である。時資と晴泰は「寺住陰陽師」、つまり興福寺に専従する陰陽師と社司らは見なしているのである。一方で時資には陰陽助、晴泰には陰陽少允の肩書きがあるように朝廷に属する官人陰陽師でもあった。⁸こうした朝廷と興福寺との両属性は別段不思議なことではない。鎌倉幕府の小侍所御簡衆として鎌倉殿に仕えた鎌倉陰陽師たちも朝廷の位職を持つ官人陰陽師であっ

たからである〔赤澤二〇一〕。

それでは彼らが南都に定住し始めたのはいつ頃なのだろうか。下向の初発を明記する史料がないため判断としないが、嘉祿元年（一二二五）には時資が南都で活動していたことが確認できるため（表2）、遅くともこの時期までには南都に「寺住陰陽師」が定住するようになったとみて大過ないだろう。鎌倉に安倍氏が定住し始めるのも承元四年（一二一〇）からで、ちょうど賀茂氏も安倍氏も一族が急速に増え始める時期にあたる〔赤澤二〇一〕。こうした氏族内の動向を踏まえれば南都陰陽師の下向も十三世紀初頭あたりと推定できそうである。

これ以降、南都に定住する「寺住陰陽師」は時資・晴泰を含めて十五世紀初頭までの間で五名が確認できる（表2）。

安倍時資 嘉祿元年（一二二五）～寛喜四年（一二三二）

安倍晴泰 寛喜四年（一二三二）

安倍資朝 文永四年（一二六七）～正応三年（一二九〇）

安倍晴氏 建治元年（一二七五）～弘安一〇年（一二八七）

安倍友有 応永一五年（一四〇八）
* 幸徳井友幸の兄弟

いずれも安倍氏で、時資か晴泰の系譜に連なる。先論の通り、この二系統を南都の「寺住陰陽師」とみなしてよいだろう。それでは次節で彼らの出自と系譜を確認しよう。

（二）南都陰陽師の系譜

安倍氏は平安後期以降、大きく三つの系統（泰親流、晴道党、宗明流）に分かれる。嫡流は泰親流で室町中期以降、安倍氏の宗家となる土御門家もここから出る。南都陰陽師は泰親流と晴道党から出ている。

①晴泰、晴氏（図1）

晴泰は庶流晴道党に属す陰陽師である。晴道党の嫡流は晴道―時晴―晴光―国道―晴繼―国高と続くが、国道以降、急速に勢力を伸ば

表2 史料に見える中世前期の南都陰陽師

* 鎌は『鎌倉遺文』

年月日	内容	陰陽師	出典
嘉祿元年（1225）5/6	元興寺塔露盤盜難の行方について占文を献ず	散位（安倍）時資	興福寺所蔵明本抄巻三紙背文書（鎌3377）
貞永元年（1232）6/11	若宮拝屋に野牛が闖入。若宮社司にて評議。牛は安倍時資の所有という。清祓を時資か安倍晴泰に行わせるか籤にて決定。晴泰に下賜。【史料1、2】*「兩人寺住陰陽師也」	陰陽助安倍時資 陰陽少允安倍晴泰	中臣祐定記、春日清祓記（『大日本史料』5-8）
文永4年（1267）8/27	榎本大明神帰座の日記勘文【史料4】	散位安倍資朝	『福智院家古文書』
文永12年（1275）3/2	移殿造営の日記勘文【史料5】	散位安倍資朝	中臣祐賢記
建治元年（1275）8/20	春日大明神帰座の日記勘文【史料6】	大学助安倍晴氏	中臣祐賢記
弘安3年（1280）4/10	未刻、若宮鳥居南脇に羽蟻出現、近來は藤原氏氏長者への言上には及ばない、よって若宮神社社が私的に安倍晴氏に尋ね11日に勘文が到来【史料10】	安倍晴氏	中臣祐賢記
弘安3年（1280）8/3	春日社若宮宝殿らに銀花数十本、安倍晴氏・資朝に実検させたところ、意見が相違したため氏長者に注進【史料11】	安倍晴氏 安倍資朝	中臣祐賢記
弘安8年（1285）3/4	陰陽寮連奏（頭安倍国高・助安倍・権助賀茂在雄による連奏、陰陽少允申請：安倍晴氏、陰陽師申請：惟宗光賢）	従五位下安倍晴氏（→陰陽少允）	兼仲卿記弘安九年春巻紙背文書（鎌15455）
弘安10年（1287）7/26	春日社若宮に野牛闖入。若宮神主中臣祐春、安倍晴氏へ使いを遣わし、戌刻に晴氏参上して祓を修す【史料8】	安倍晴氏	中臣祐春記
正応3年（1290）5/1	西刻、春日社拝殿に銀花出現、安倍資朝に実検させ、銀花にあらずとの回答、よって藤原氏氏長者には注進せず	安倍資朝	中臣祐春記
応永15年（1408）6/11	興福寺学侶方より「野多（野田）陰陽師」友有に拝屋の立柱の日記勘文を依頼。友有勘文を捧ぐ【史料7】	安倍友有	若宮拝屋上棟記（『大日本史料』7-9）

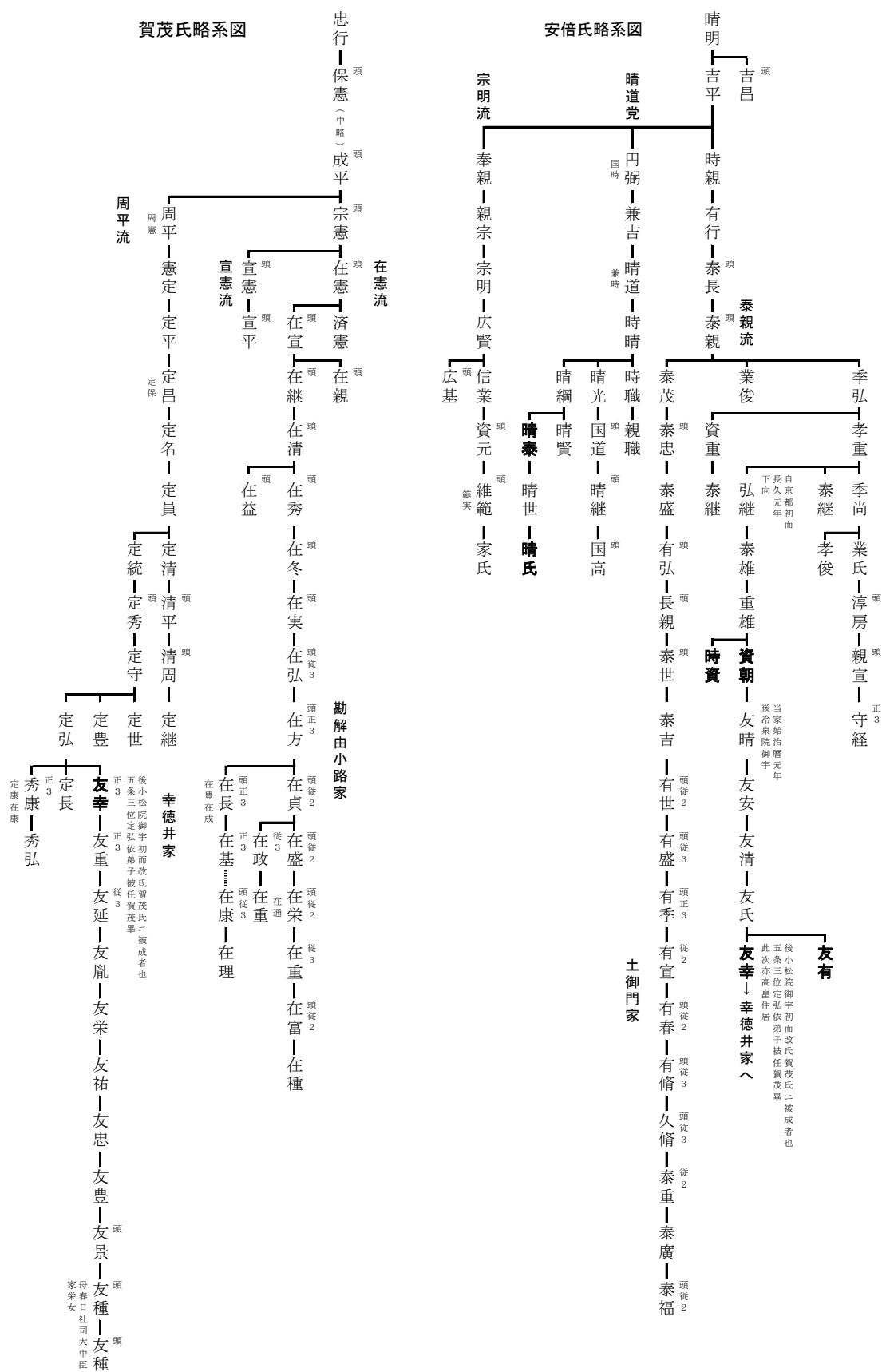


図 1 南都陰陽師関係系図

*太ゴチックが一次史料で南都陰陽師として確認できる者である。人名右肩の頭は陰陽頭、正3は正三位を示す。傍注は「陰陽家系図」（宮内庁書陵部）に載るものである。

し、三代続けて陰陽頭を出す（以下、鎌倉期の陰陽師については〔赤澤二〇一〕による）。また、晴道党は鎌倉に下向した陰陽師を多く出している点も特徴である。鎌倉陰陽師草創期の一人親職とその子孫は北条得宗家と緊密な関係を築いて勢力を誇り、後に関東に居住しながら陰陽頭に任官する者も出る。国道も鎌倉に一時期下向し、鎌倉陰陽師の主導的役割を果たしたが、これは四代將軍九条頼經の父道家の差配によると思われる。国道が庶流晴道党出身で初めて陰陽道第一者・陰陽頭にまで昇り詰めることができたのは九条家との関係が背景にあったからに他ならない。そして晴泰の兄晴賢も鎌倉で活発に活動した陰陽師の一人であった。晴泰の父晴綱は漏刻博士や内蔵助を歴任し、従四位下まで昇進するが、注意しておきたいのは晴綱が九条家に私的に奉仕する陰陽師でもあった点である。⁽⁹⁾晴泰が南都に下向したのはこうした摂関家との関係によるものだった可能性をひとまず指摘しておきたい。

晴泰は安倍氏の主要な系図に確認できる。『尊卑分脈』には見られないが、壬生本『医陰系図』（宮内庁書陵部所蔵）のほか、『統群書類従』「陰陽家系図」、『系図纂要』にも載る。とりわけ数ある賀茂・安倍氏の系図の中でも最も信頼できる『医陰系図』の晴泰の頭注に「以下住南都」が付されていることから、晴泰以降、その子孫たちも南都に定住したことが、またこうした情報が高貴族間で共有されていたことを示している。晴泰の子晴世は記録類から確認することができないが『医陰系図』の傍注には「従五下、大膳亮」とある。その子晴氏は『医陰系図』の傍注に「従五下、大学助」とあり、かつ南都での活動が表2に確認できる。さらに注目したいのは、弘安八年（一二八五）の「陰陽寮申文」において陰陽頭安倍国高・助安倍（晴宗か）・権助賀茂在雄が寮奏で陰陽少允に晴氏を推挙している点である。⁽¹⁰⁾つまり、晴泰の系統は南都に定住するようになったとはいえ、京の陰陽師と関係を持ち続けていたことになる。このようなあり方は鎌倉に定住して幕府に仕えた鎌倉陰陽師と同様である。

なお、『医陰系図』には晴氏の子に晴季を載せ、傍注に「従五下、陰陽少允」とあるが、一次史料からは確認できないため、これ以降断絶したものと思われる。

②時資・資朝、友有（図1）

晴泰の系統が複数の系図に確認できるのに対して、時資の系統を載せるのは「陰陽家系図」（宮内庁書陵部所蔵）のみである。また、彼らは京の公家の日記にも一切見られない。果たして本当に安倍氏に連なる陰陽師だったのかという疑問すら湧いてくる。

彼らの存在を示す唯一の系図である「陰陽家系図」をもう少し詳細に見てみよう。同系図によれば、時資・資朝は泰親流の系統に属す。泰親流は「指すの神子」と称された安倍氏中興の祖泰親から主に長子季弘の系統、次子業俊の系統、三子泰茂の系統に分かれ、それぞれ陰陽寮官職や祈禱祭料を譲任・譲与され、朝廷や公家社会において安倍氏の主流陰陽師として陰陽道の一翼を担った。⁽¹¹⁾時資・資朝は季弘の養子孝重の子弘継から三代後胤に当たるが、系図上（図1）で二人と同世代に当たる親宣・泰世は鎌倉末期から南北朝期に活動が見られる者たちであり、寛喜四年（一二三二）に「寺住陰陽師」（史料1）として見える時資とは明らかに時代が異なる。また、資朝は文永年間から正和年間にかけて南都で活動が見られるので、親宣・泰世より一世代上にあたる。ちなみに「陰陽家系図」では時資と資朝を兄弟とするが、活動時期が三十〜四十年ほど離れており、信じがたい。さらに大きな問題点は同系図に付されている傍注の内容である。時資らの祖である弘継の傍注には「自京都初而長久元年下向」⁽¹³⁾とあり、長久元年（一〇四〇）に南都に下向したとするが、安倍氏の祖晴明が死去したのが寛弘二年（一〇〇五）であり、その三十五年後に晴明から八代後胤の弘継が南都に下向したというのは明らかに矛盾する。さらに資朝の子友晴には「当家始、治暦元年後冷泉院御宇」とある。当家というのは幸徳井家のことであろうが、これも治暦元

年（一〇六五）後冷泉天皇の時とは到底考えがたい。つまり、「陰陽家系図」には明らかな作為が看取されるのである。しかし、時資・資朝が安倍氏を名乗っていたことは後述する諸史料から確認できる。この疑問点については彼らの活動を検討した後に改めて考えてみたい。

③南都陰陽師の活動

南都陰陽師の活動内容は大きく、①日次勘申、②呪術、③占術の三点である。これは朝廷や鎌倉における官人陰陽師の基本的な職掌と同じだが、天文観測および勘申と造曆を行っていた形跡は認められない。

（一）日次勘申

周知のように興福寺・春日社は藤原氏の氏寺・氏神という重要な地位にあったため、仏事・神事や堂舎・社殿の造営は朝廷や藤原氏の氏長者が管掌する事案であった。管見の限り院政期から鎌倉末期における興福寺・春日社の日次勘申を示したのが表3である。これをみると、朝廷主催の造営やそれに伴う遷宮、行幸、奉幣、供養は陰陽寮が日次を選んでいる。例えば、嘉禎二年（一二三六）四月の春日社の遷宮造営にかかる日次勘文は次のようである。

【史料3】『中臣祐定記』嘉禎二年（一二三六）四月十二日条（『春日社記録』1巻）

一、十二日移殿御鋪理始^レ之、
同日御遷宮食部 宣旨・日時勘文到来、
（中略）
陰陽寮

扱申 可^レ被^レ造^二春日社^一雑事 日時
奉^レ渡^二御鉢御假殿^一 日時
今月十四日庚子 時寅二点

立^三正殿柱^一上棟 日時

同日 庚子 時午二点

立柱次第 先北、次南、次西東

嘉禎二年四月十一日 権允兼近江権大掾賀茂朝臣在職

陰陽博士兼因幡權介賀茂朝臣在盛

漏刻博士安倍朝臣業経

頭賀茂朝臣在繼

このように神体を仮殿に移す日次、正殿の立柱・上棟の日次、また立柱の順といった遷宮に関わる重要行事は陰陽寮が定めて春日社社司へ宣旨とともに送っている。

一方、氏長者の参詣や供養、その他の雑事は氏長者が摂関家に私的に奉仕していた陰陽師に選ばせていた。また、朝廷主催のものであっても氏長者が内々に陰陽師を召して日次・方角の禁忌について問い合わせていた。例えば、文治三年（一一八七）十月十九日、九条兼実は賀茂宣憲・安倍季弘・賀茂在宣（後に賀茂清憲も加わる）を召し、内々に春日社棟上の日次について再検討を求めている。というのも、もともと正月十三日に決定していたが来年より大將軍が南にいたので氏長者は禁忌に当たるため、その対処、方違えの方法について意見を求めたのである。しかし、陰陽師の勘申は一致せず、二ヶ月にわたって日次が議論された（表3（26～31））。このように興福寺・春日社に関わる日次勘申は朝廷主催のものであっても藤原氏氏長者のものである基本的な在京の官人陰陽師が選ぶのが原則であったようである。

ところが、十三世紀後半になると南都陰陽師が日次勘文を献じる例が見られるようになる。

【史料4】『福智院家古文書』文永四年（一二六七）八月二十七日付「安倍資

朝日次勘文」

扱申榎本大明神御帰座吉日時

表3 院政期～鎌倉期における春日社・興福寺の日次勘文

※太ゴチックが南都陰陽師、出典の鎌は鎌倉遺文

	年月日	内容	陰陽師	出典
1	承保4(1077)1/22	興福寺塔供養		水左記
2	康和4(1102)10/20	興福寺供養		中右記
3	康和5(1103)6/19	興福寺供養		中右記
4	長治1(1104)4/12	春日社遷宮	賀茂光平, 賀茂家栄	中右記
5	嘉承2(1107)2/9	興福寺倉修理	賀茂家栄	殿暦
6	天永2(1111)1/27	春日社御塔造立	賀茂家栄, 安倍泰長	中右記
7	天永3(1112)7/21	春日社御塔木作り・築壇・居礎	安倍泰長, 賀茂家栄, 賀茂光平	中右記, 殿暦
8	天永3(1112)7/28	春日社御塔木作り・築壇・居礎	賀茂光平, 安倍泰長, 賀茂家栄	中右記, 殿暦
10	天永4(1113)6/13	春日社塔心柱立柱(内々)	安倍泰長	殿暦
11	天永4(1113)7/1	春日社塔心柱造立	安倍泰長	殿暦
12	永久1(1113)7/26	春日社塔仏始め	安倍泰長	殿暦
13	永久2(1114)4/12	春日社の塔の方角禁忌を諮問	賀茂光平	中右記
14	永久2(1114)7/3	春日社塔造立・南大門の壇築	賀茂家栄	殿暦
15	康治2(1143)閏2/29	春日社仮殿遷宮		本朝世紀
16	大治4(1129)10/3	春日社仮殿遷宮行事所定め	陰陽頭賀茂家栄	中右記
17	大治5(1130)2/5	祈年穀奉幣・春日社修造		中右記
18	仁平3(1153)8/8	春日社参詣雑事定め *勘文あり	陰陽頭賀茂憲栄	台記別記
19	治承5(1181)3/6	興福寺造営	陰陽頭賀茂在憲	吉記
20	治承5(1181)6/8	興福寺造立定めの日次禁忌	賀茂在憲	吉記
21	治承5(1181)6/15	興福寺造立定め, 木作り始め・立柱・上棟 *勘文あり	陰陽助賀茂宣憲, 陰陽権助賀茂済憲, 権暦博士賀茂憲定, 権漏刻博士菅野季親, 陰陽大属菅野季長	吉記, 玉葉
22	文治3(1187)5/17	興福寺金堂・南円堂上棟(内々)	賀茂在宣	玉葉
23	文治3(1187)7/9	興福寺南大門の棟上	陰陽頭賀茂宣憲, 賀茂在宣	玉葉
24	文治3(1187)10/19	春日社棟上 *氏長者の方違について諮問するも陰陽師の勘申不同	賀茂宣憲, 安倍季弘, 賀茂在宣	玉葉
25	文治3(1187)10/20	興福寺棟上, 春日詣	安倍季弘, 賀茂在宣	玉葉
26	文治3(1187)10/24	興福寺参詣・棟上 *寺家の営みができないので来年秋冬というのは困る, との申し出に対して, 兼実は賀茂在宣を召し日次を問う。在宣いわく年内は一切不可だが1/27参詣, 29棟上は可能。よって日次を決定, 僧正喜悦。ただし明日他の陰陽師に確認する	賀茂在宣	玉葉
27	文治3(1187)10/25	興福寺参詣・上棟 *日次を確認。安倍季弘は賀茂在宣の申状と同じ。賀茂宣憲は憚りありとするが在宣・季弘は「当時名士」により兩人の説を採用	賀茂宣憲, 安倍季弘, 賀茂在宣	玉葉, 吉記
28	文治3(1187)11/1	興福寺参詣・棟上 *先日賀茂在宣が選んだ興福寺参詣・棟上の日次について, 賀茂宣憲と安倍季弘から丑日憚り・近年不吉多しと反対し代替案として21日参詣, 23日上棟(青竜脇日だが)を推す, 在宣・済憲はこれに対して賀茂道言の先例を引いて反駁, 兼実宣憲に尋ねていわく, 賀茂家栄は「末代之名士」であるが, 陰陽雑書には丑日憚りが記載されていないし, 丑日の禁忌は青竜脇日はどではないと思うが如何と。宣憲・季弘答えていわく, 家栄の書には載っていないが賀茂氏の先祖光栄は丑日忌むべしと勘文に記しており(勘文副進), 光栄の末葉である在宣がこれを選けてはならないと反論。これに対し在宣いわく, 先祖の勘文はみな保管しているが子孫である我々は取舍選択して採用していると述べる。決着付かず大臣へ諮問するが, 最終的に在宣・済憲案が採用	賀茂宣憲, 安倍季弘, 賀茂在宣, 賀茂済憲	玉葉
29	文治3(1187)11/3	興福寺参詣・上棟日次 *陰陽師間の相論について, 左大臣藤原経宗に意見を求めた返答が到来, 経宗は青龍腋日(賀茂宣憲・安倍季弘の説)を支持		玉葉

	年月日	内容	陰陽師	出典
30	文治3 (1187) 12/24	春日社神宝行事所始め	賀茂在宣, 安倍泰茂	玉葉
31	文治3 (1187) 12/27	興福寺上棟の日次を議す *九条兼実邸にて興福寺上棟の日次を議す, そもそも南が大将軍に当たるうえ公家の御遊年方に当たり, 両方の方違は不可能, よって氏長者の進止として沙汰すべしと後白河院より仰せあり, 賀茂宣憲・賀茂済憲・安倍泰茂が勘文を献ず, 兼実披見	陰陽頭賀茂宣憲, 陰陽助賀茂済憲, 陰陽大允安倍泰茂	玉葉
32	文治4 (1188) 6/18	興福寺南門堂造仏始め	賀茂在宣	玉葉
33	建久5 (1194) 7/23	興福寺金堂中尊始め	賀茂宣憲, 安倍季弘	玉葉
34	承元2 (1208) 12/15	興福寺北門堂造仏始め	陰陽頭賀茂宣平	猪隈関白記
35	安貞2 (1228) 10/10	興福寺維摩会	賀茂宣俊	民経記
36	安貞2 (1228) 10/28	春日社の御塔供僧定め	賀茂宣俊	民経記
37	嘉禎2 (1236) 2/8	春日社恒例の神楽 *勘文あり	暦博士賀茂□□ (道茂)	兼仲卿記建治二年正月巻紙背文書 (鎌4917, 12246, 補1188)
38	嘉禎2 (1236) 4/11	春日社雑事 *勘文あり【史料3】	陰陽頭賀茂在繼, 漏刻博士安倍業経, 陰陽博士賀茂在盛, 陰陽権(少) 允賀茂在職	中臣祐定記 (鎌4964)
39	文永4 (1267) 8/27	榎本大明神帰座【史料4】	安倍資朝	福智院家古文書
40	文永12 (1275) 3/2	移殿造営 *勘文あり【史料5】	安倍資朝	中臣祐賢記
41	建治1 (1275) 8/20	春日大明神帰座 *勘文あり【史料6】	安倍晴氏	中臣祐賢記
42	建治1 (1275) 9/1	春日社若宮手水屋雑具渡御 *勘文あり	前陰陽権少允賀茂在春	中臣祐賢記 (鎌12007)
43	建治3 (1277) 8/25	興福寺再建	陰陽助安倍泰盛	師守記 貞和3.2/16条
44	弘安1 (1278) 6/19	興福寺講堂上棟	陰陽頭賀茂在清	師守記 貞和3.2/16条
45	弘安1 (1278) 閏10/1	興福寺講堂上棟	陰陽頭賀茂在清	勘仲記
46	弘安2 (1279) 10/26	興福寺上棟	陰陽助賀茂在兼	勘仲記
47	弘安9 (1286) 2/3	春日行幸・行事所始め・神宝始め *勘文3通あり	陰陽頭安倍国高, 権天文博士安倍有弘, 賀茂在員, 安倍重親, 天文博士安倍晴直, 陰陽権少允賀茂在材, 漏刻博士賀茂在千	勘仲記 (鎌15800 ~ 02)
48	弘安9 (1286) 3/12	春日行幸読経 *勘文あり	陰陽頭安倍国高, 賀茂在員, 暦博士賀茂在秀, 安倍重親, 天文博士安倍晴直	勘仲記 (鎌15844)
49	延慶3 (1310) 11/14	春日社三十八所社造立	陰陽頭賀茂在益, 権天文博士安倍長親, 賀茂在藤, 賀茂在守	石崎直矢氏所蔵文書 (鎌24115)

今月晦日甲申 時寅・戌・亥

付宜令「注進」之候、御八講以前此外□可然日次不_レ及_レ見候、

文永四年八月廿七日

散位安倍資朝

【史料5】『中臣祐賢記』文永十二年（一二七五）三月二日条（『春日社記録』2巻）

一、自_二衆徒_一所_レ被_レ出勘文案

扱申可_レ被_レ造_二移殿_一吉日時

今月十一日壬午上 時寅巳

同 廿 日辛卯中 時寅申

同 廿三日甲午上 時卯未

右、依_二吉日_一注進如_レ件

文永十二年三月二日

散位安倍資朝

【史料6】『中臣祐賢記』建治元年（一二七五）八月二十日条（『春日社記録』2巻）

一、廿日、自_二衆徒_一以_二中綱賢忍・現譽_一被_レ命云、御帰座時剋勘文

如_レ此、明日戌刻也、兼参_二儲金堂前_一、無_二乙度_一能々毎時任_レ例

可_レ令_レ致_二沙汰_一候也、臨期フシフシノ物違乱之由被_レ申者、尤僻

事也ト在_レ之、六方衆ナトノ参社事ハ、不_レ可_レ有也、只社家沙汰

ハカリニテ可_レ有_二御帰_一座候也ト云々、

扱申大明神御帰座日時

今月廿一日、己未、 時寅・卯・戌

建治元年八月廿日

大学助安倍晴氏

史料4は春日社の摂社榎本大明神の帰座の日次を安倍資朝が勘申し、史料5は興福寺衆徒の命を受けた安倍資朝が移殿（内侍殿）造営の日次を

勘申ししている。まず、資朝が安倍氏を名乗っていることが確認できる。

史料6は衆徒の命によつて春日社の神木が強訴から帰座する日次を安倍

晴氏に勘申させている。このように摂社や移殿など、興福寺学侶方や春日

日社社司方の裁量に任される案件については南都陰陽師が管轄するよう

になったと思われる。時代はやや下るがこれを端的に示すのが次の史料

である。

【史料7】『若宮拝屋上棟記』応永十五年（一四〇八）六月十一日付「安倍友

有日次勘文」（『大日本史料』七ノ九、応永十四年十一月九日条）

学侶集会所評定中ヨリノ使ニテ、随堯□□先度拝屋立柱日時事、京

都エ不_レ及_二注進_一候、然者野多陰陽師友有ニ、今月廿ヨリ内ヲ可_二

勘進_一之由、為_二社家_一可_レ被_二示遣_一候之由、学侶并唐院坊主様申ト天

候ト、以_二春雄_一申間、祐光返事□承了、□□□□□□可_レ進_二執_一

遣了、仍御神事以後遣_二友有方ヘ状_一云、

当社若宮拝屋可_レ有_二造替_一候、就_二立柱日時事_一、今月廿日より内お

可_二勘給_一之由、自_二寺門_一被_レ命候之間、如_レ此申候、早々可_レ被_レ勘

候哉、恐々謹言、

六月十一日 祐光

兵衛殿

以_二常住代官_一遣了、同日勘文到来、

勘進 若宮拝屋立事

今月十八日 辰時

応永十五戊子 六月十一日 安部友有

史料7は十五世紀初頭のものであるが、興福寺学侶方の評定中が若宮拝

殿の立柱上棟の日次について若宮神主である中臣祐光に相談を持ちかけ

たところ、このことについては「京都へ注進に及ばず」（傍線部）として、

「野多（野田）陰陽師」安倍友有に吉日の勘申を命じている。

このように興福寺や春日社の造営や行事に関わる日次勘申は基本的に

京都陰陽師の管掌であったが、十三世紀後半になると学侶方や社家が南

都陰陽師に委ねるケースが出てくるようになる。その基準は京都へ注進

する必要がないと判断された案件であり、京都陰陽師と南都陰陽師とで

分業が進められるようになったと理解できよう。

(二) 呪術

陰陽道の呪術といえは泰山府君祭や土公祭といった陰陽道祭祀が著名であるが、南都陰陽師が行った呪術は祓のみである。史料1・2では若宮拝殿に闖入した牛の怪異により安倍晴泰が祓を修しているが、こうした事例は他にも確認できる。

【史料8】『中臣祐春記』弘安十年七月二十六日条（『春日社記録』3巻）

廿六日、一童南辺ヨリ野牛一頭道ヨリ上へ参、即若宮御上ノ方へ行之間、神人大社ノ廻廊ヨリ東ノ上ノ山ニテ取レ之畢、仍同日、陰陽師晴氏許へ於「祐春」沙汰送遣之了、仍同夜戌刻、晴氏淨衣、参「勤御祓」了、牛とらへたる所ニテ可レ令「勤仕」之由、晴氏令レ申之間、即廊ヨリ東辺ニテ勤「仕之」云々、

弘安一〇年（一二八七）七月二十六日、野牛が若宮から入り込み春日社の方へと向かってしまい、追いかけた神人は春日社の廻廊から東方の山上でようやく牛を捕らえることができた。この知らせを受けて若宮神主中臣祐春は安倍晴氏に使いを遣わし、夜に晴氏が参じて「牛を捕らえたところで祓を修すべし」と注進したため、祐春はこれを容れて廻廊の東の辺りで祓を行うことにした。

こうした神域における触穢、不浄に対する祓は南都陰陽師の管轄であったことがわかるが、陰陽師だけが執行している点は興味深い。例えば、宇佐八幡宮では境内不浄に対する清祓を陰陽師と祝が執行しており〔赤澤二〇二一a〕、神社によって対処が異なっていたことがわかる。

また、晴氏が祐春の呼び出しに即座に応じている点にも注目したい。これは晴氏が興福寺・春日社の近辺に居住していた証左であり、こうした喫緊の課題に備えて南都陰陽師は興福寺周辺に定住する必要があったのだろう。それゆえ「寺住陰陽師」と称されたものと考えられる⁽¹⁴⁾。

(三) 占術

国家の大事が起きたとき、朝廷では軒廊御卜を行い、吉凶を占った。軒廊御卜は内裏の紫宸殿の向かって右側に続く「軒廊」という廻廊に神祇官と陰陽寮の官人が参仕し、前者は亀卜、後者は六壬式占をもって占うもので、朝廷における最高位の占断であった〔西岡二〇〇二〕。占いの対象となるものは、地震や噴火、炎旱や霖雨などの自然災害・異常気象、御所や寺社で起きた怪異、天皇の病などであるが、寺社で起こる怪異には、動物の侵入・出産・死体遺棄、植物の異常発生、神木の顛倒や枯死、建造物の倒壊・火災、調度の毀損・紛失・盗難、社殿の鳴動などがあった。すなわち、人間界以外の生き物が聖域を侵すことや、目に見えない「モノ」が異常事態を発生させることで、なにかしらのメッセージを人間に伝えているものとしてとらえられ、陰陽師はそのメッセージを読み解く職能者だった。春日社は藤原氏の氏神を祀る神社とはいえ、二十二社の上七社の一つであったから、ここで起こった怪異は当然ながら朝廷に報告され、軒廊御卜で占いが行われた。

院政期から鎌倉期における興福寺・春日社の境内や神域で発生した怪異を占った事例をまとめたものが表4である。怪異の種類は落雷、倒木といった自然現象によるもの、鳴動、光物といった怪異現象、火事、鏡鳴、釜鳴、鏡損、金物落下、銀花開花など建造物や調度に起きたもの、そして史料1や8で見られたような動物（神馬、鹿、鷲、羽蟻、蛇、狐）の闖入、死穢と多岐にわたる。また、春日社神主や年預の人選も占いによって決していた⁽¹⁵⁾（表4―24、25、44、47、50、52、56、63）。

こうした様々な怪異や社司の人選に対する占いの場と方法であるが、明確に軒廊御卜と記されているケース（表4―15、22、23、29、31、49、54、55）もあれば、摂関家の蔵人所で内々に占う場合もある（表4―2、3、4、6、9、27、28、38、46、61、62、66、67）。それぞれ

表 4 院政期～鎌倉期における春日社・興福寺をめぐる占

※太ゴチックが南都陰陽師、出典の鎌は鎌倉遺文

	年月日	占いの原因	陰陽師	出典
1	嘉保3 (1096) 11/25	春日社鳴動		後二条師通記
2	康和3 (1101) 6/5	春日社怪異, 藤原氏上達部慎み	安倍泰長	殿暦
3	康和5 (1103) 9/15	興福寺鹿入, 氏長者・公卿慎み	賀茂家栄	殿暦
4	長治2 (1105) 5/26	春日社怪異, 長者慎み, 病事		殿暦
5	嘉承1 (1106) 6/10	興福寺食堂に落雷		永昌記
6	嘉承2 (1107) 9/3	8/27 春日社四宮鏡聲, 長者慎み		殿暦
7	天仁2 (1109) 9/12	春日社四宮の鏡落下, 神事不浄		殿暦
8	天永2 (1111) 2/2	1/26 春日社林中の六道橋下にて法師死去, 小童怪我, 本所口舌		中右記
9	天永2 (1111) 4/24	春日社怪異 (4/9 山内の木 70 余本転倒), 神事不浄, 氏人中, 子・丑・卯・酉の人慎み, 病事	安倍泰長, 賀茂家栄	殿暦, 中右記
10	天永2 (1111) 9/5	興福寺の鷲怪異 (昨日注進), 口舌物忌	賀茂光平, 安倍泰長, 賀茂家栄	殿暦
11	天永3 (1112) 5/16	5/14 興福寺南円堂脇榎木転倒		殿暦
12	天永4 (1113) 2/25	2/16 興福寺蛇出来, 口舌		殿暦
13	天永4 (1113) 4/28	興福寺衆徒参洛の吉凶, 軒廊御卜		本朝世紀
14	天永4 (1113) 7/10	7/5 春日社神宝調具奉納の時震動, 慎み嚴重		殿暦
15	永久1 (1113) 7/15	春日社震動, 軒廊御卜		殿暦
16	永久2 (1114) 2/6	2/3 春日社木 150 本が大風により転倒, 慎み病事		殿暦
17	永久3 (1115) 8/4	7/29 春日社に蛇出来		殿暦
18	永久4 (1116) 7/4	6/29 春日社祓戸南方に落雷, 口舌		殿暦
19	永久4 (1116) 7/6	7/5 春日社回廊板敷下に狐の死体, 慎み嚴重		殿暦
20	永久5 (1117) 12/25	興福寺中門左方仁王の足・鬼が焼失		殿暦
21	永久6 (1118) 2/10	春日祭神馬斃れる, 穢氣口舌	安倍泰長, 賀茂家栄	中右記
22	天承2 (1132) 1/27	春日社触穢, 軒廊御卜		中右記
23	天承2 (1132) 1/28	春日社触穢 (前日に続き軒廊御卜)		中右記
24	長承4 (1135) 2/20	春日社神主の人選。所望の者 5, 6 人あり, その心を知らず, よって御占		中右記
25	仁平3 (1153) 7/4	春日社若宮神主の人選 *占形あり	陰陽頭賀茂憲栄, 権陰陽博士安倍泰親	台記
26	仁安2 (1167) 3/1	2/5 興福寺の堂内蛇出現 * 2/21 付け占形を興福寺に送る	賀茂宣憲, 安倍時晴	山槐記
27	承安3 (1173) 1/29	春日社に怪異 * 九条兼実のもとに安倍泰親が祇候して密々に上申, 占筮の結果は口舌・病事嚴重	安倍泰親	玉葉
28	承安4 (1174) 7/1	春日社怪異 * 関白松殿基房より占形が到来, 兼実披見, 口舌・物忌		玉葉
29	治承2 (1178) 3/6	春日社回廊壊すべきか否か, 軒廊御卜		玉葉
30	治承5 (1181) 6/12	春日社怪異・造営について人意で計りがたい場合は卜筮をするのが古今の習い		玉葉
31	治承5 (1181) 6/22	賀茂社竈鳴動, 春日社の鏡破落, 軒廊御卜		吉記
32	文治2 (1186) 5/17	5/15 ~ 17 春日社に金色蛇出現		玉葉
33	文治2 (1186) 5/19	春日社怪異	賀茂在宣	玉葉
34	文治2 (1186) 5/22	18 日に春日社御山に光物出現	賀茂在宣, 安倍泰茂, 安倍晴光	玉葉
35	文治2 (1186) 9/4	春日社怪異, 口舌, 壬癸日物忌	安倍晴光	玉葉
36	文治2 (1186) 11/14	春日社怪異, 口舌・兵革	賀茂宣憲, 安倍季弘, 賀茂在宣	玉葉
37	文治3 (1187) 4/9	4/6 春日社鳴動		玉葉
38	文治3 (1187) 4/10	4/9 再度春日社鳴動, 春日社から使者到来, 内々に陰陽師に使いを遣わし占わせる, 頗る憚りあり		玉葉
39	文治3 (1187) 5/24	春日社怪異	安倍業俊, 賀茂宣平	玉葉
40	文治4 (1188) 2/17	興福寺釜鳴 (密々), 口舌・火事		玉葉

	年月日	占いの原因	陰陽師	出典
41	文治 4 (1188) 3/19	興福寺南円堂の黒木屋が風で転倒 *方違の必要の有無について陰陽師に諮問したらどうかとの家司光長らの進言に対して、兼実答えていわく、前年に家の門が風で転倒した時、故頭賀茂在憲が非常時は陰陽師に尋ねる必要なしとのことであったが、明日占わせることとする		玉葉
42	文治 5 (1189) 3/16	昨日春日社で風なくして柳が拝殿に掛かる。病事・口舌		玉葉
43	建久 2 (1191) 4/15	4/13 春日社に羽蟻出来		玉葉
44	建久 2 (1191) 11/2	春日祭の役人事について相論	安倍晴光	玉葉
45	建久 4 (1193) 4/12	春日社怪異		玉葉
46	建永 2 (1207) 8/23	春日社若宮触穢と多武峯鳴動、病事・氏長者口舌	陰陽頭賀茂宣平、安倍資元、安倍泰忠	猪隈関白記
47	貞永 1 (1232) 5/10	春日社神主の人選	安倍国道、安倍忠尚、安倍季尚	洞院摂関記
48	仁治 2 (1241) 6/27	3/18 春日社第二殿千木・東木口金物落下 *占形あり	陰陽権助安倍良光、権天文博士安倍季尚、安倍晴繼、陰陽博士賀茂在盛、天文博士安倍家氏	中臣祐定記(鎌5900)
49	寛元 3 (1245) 6/22	春日社千木金物落下、軒廊御卜		百鍊抄
50	寛元 4 (1246) 6/2	春日社権預の人選 *摂政一条実経邸の蔵人所にて行う	安倍晴繼、賀茂在盛、安倍家氏	葉黄記
51	宝治 2 (1248) 2/30	春日社車宿転倒		百鍊抄
52	宝治 3 (1249) 3/1	春日社司(権預)の人選 *摂関家蔵人所において行う、占形あり	陰陽頭安倍良光、賀茂在清、天文博士安倍晴繼、賀茂在盛、安倍清基、権漏刻博士安倍泰盛、安倍尚繼	岡屋関白記
53	宝治 3 (1249) 3/10	春日社若宮の古木が転倒 *占形あり	賀茂在清、賀茂在盛、権漏刻博士安倍泰盛	岡屋関白記
54	文永 1 (1264) 7/29	春日山鳴動、軒廊御卜		続史愚抄
55	文永 1 (1264) 8/6	春日社怪異、軒廊御卜		続史愚抄
56	文永 5 (1268) 閏1/14	春日社年預の人選選定	陰陽師 5 人	深心院関白記
57	弘安 3 (1280) 4/10	若宮鳥居南脇と 38 か所の鳥居の南脇に羽蟻出現、占形あり【史料 10】	安倍晴氏	中臣祐賢記
58	弘安 3 (1280) 8/3	春日社若宮宝殿并小社にて銀花数十本が開く【史料 11】	安倍晴氏、安倍資朝	中臣祐賢記
59	弘安 3 (1280) 8/16	8/3 春日社若宮宝殿・小社銀花出現、占形あり	安倍有光、賀茂在有、安倍泰統	中臣祐賢記(鎌14052)
60	弘安 4 (1281) 6/28	春日社若宮馬道に銀花出現		続史愚抄
61	弘安 5 (1282) 1/29	1/24 春日社神木鳴動、氏長者病事慎み *関白鷹司兼平邸にて御占、占文あり	安倍有光、天文博士安倍晴直、安倍有弘	勘仲記(鎌14548)
62	弘安 5 (1282) 2/3	1/24 の春日社神木鳴動 *摂関家蔵人所にて御占、占形あり	陰陽助賀茂在兼、陰陽権助安倍国高、権暦博士賀茂在言、権天文博士安倍有弘、暦博士賀茂在秀	勘仲記(鎌14557)
63	弘安 7 (1284) 8/24	春日社司の人選	安倍有光、賀茂在秀、安倍淳房	勘仲記
64	弘安 10 (1287) 3/30	3/22 春日社若宮鳥居南脇に羽蟻出現、若宮神主中臣祐春が殿下(鷹司兼平)に注進。摂関家蔵人所占で占う。占形あり【史料 9】	権天文博士安倍有弘、安倍淳房、安倍重親、天文博士安倍晴直、陰陽少允安倍長親	中臣祐春記(鎌16226)
65	正応 3 (1290) 5/1	酉刻、春日社拝殿の内の南の柱に銀花出現、花ではないため氏長者には注進せず	安倍資朝	中臣祐春記
66	正和 1 (1312) 5/17	5/15 春日社廊内にて鹿斃、氏長者疾病・火災		続史愚抄
67	正和 1 (1312) 6/12	春日社若宮拝殿内にて銀花咲く、氏長者病・口舌・火災		続史愚抄
68	正和 1 (1312) 9/22	9/17 春日社振動、廂殿正体落下、蔵人所御卜、神事違例、穢氣不浄、坤方口舌、病事・火事	陰陽師 7 人	花園天皇宸記

のケースの原因をみても怪異の内容によって分けていたわけではなさそうである。春日社で発生した怪異について九条兼実が「以人意輒難計申^一、疑難^レ決之^レ時、以^二卜筮^一決^レ之、古今之習也⁽¹⁶⁾」と述べているように、人意で計りがたいことが起きた場合、卜筮を行い判断を仰ぐ当時の社会通念に基づいて処置がとられていたのである。ということは、その怪異が国家および天皇に関わる場合は軒廊御卜で占われ、藤原氏に関わる場合は摂関家蔵人所で占われたと考えるのが妥当だろう。

これらを占う陰陽師は軒廊御卜では当然ながら陰陽寮の官人陰陽師であり、摂関家蔵人所占では摂関家に出入りする在京の官人陰陽師であったが、藤原氏に関わる案件の中には鎌倉中期頃から南都陰陽師が占う事例が散見されるようになる。まずは春日社で怪異が発生した時の対応について次の史料を見てみよう。

【史料9】『中臣祐春記』弘安十年（一二八七）三月二十二日条（『春日社記録』3巻）

今日廿二日、若宮鳥居南脇羽蟻出現、任^レ例言^二上^一殿下^一、言上

事由

右、今日廿二日午刻、当社若宮鳥居南脇羽蟻出現、仍言上如^レ件、

弘安十年三月廿二日

春日若宮神主祐春^上

奏狀貳通謹令^レ進^二上^一之^レ候、以^二此趣^一可^レ有^二念御披露^一之旨、可^下令^二申入^一給^上候、恐々謹言

三月廿二日

春日若宮神主祐春

謹上 宿院御目代殿

（中略）

四月十日、到^二来羽蟻^一事 長者宣并御占形（以^二主殿権預^一使便宜被^レ下^レ之、仍不^レ及^二御返事^一）

当社羽蟻事、御占形如此候、雖^レ非^二殊事^一、可^下令^二祈請申^一給^上

之由、左少弁殿御奉行所候也、仍執達如^レ件、

四月三日

左衛門尉景教

謹上 若宮神主殿

春日社司言上怪異吉凶（今月廿二日午時若宮者鳥居南脇羽蟻出現）

占、今月廿二日壬子時加午四月節、天罡臨^レ宣為^レ用、将天后、中^二勝先騰蛇^一、終伝^二送六合^一、御行年丑上大衝大陰、卦遇物、狡童送女跡蹴九醜、

推之自然事歟

弘安十年三月卅日

陰陽少允安倍安倍長親

天文博士安倍朝臣晴直

散位安倍朝臣重親

主税権助安倍朝臣淳房

権天文博士安倍朝臣有弘

弘安十年（一二八七）三月二十二日、若宮の鳥居の南脇に羽蟻が発生した。寺社の敷地内において羽蟻の出現が怪異に相当する事例は京だけでなく、鎌倉でも見られる（赤澤二〇二一b）が、若宮神主中臣祐春は殿下（藤原氏氏長者鷹司兼平）に報告の使者を遣わした。その結果、四月十日に長者宣とともに占形が春日社に到来した。この占形は権天文博士安倍有弘以下四名の連署によるものであったが、このメンバーを見る限り、軒廊御卜で占文を奉ずるはずの陰陽道第一者や第二者といった最上臈の陰陽師がいなかったため、摂関家蔵人所占とみて大過ないだろう。このように弘安年間までは春日社で怪異が起こった時は京の藤氏長者のもとへ報告し、その決を仰ぐというのが通常の対応であった事がわかる。ところがちょうどこの時期あたりから南都陰陽師による占断も確認できるようになる。

〔史料10〕『中臣祐賢記』弘安三年（二二八〇）四月十日条（『春日社記録』3巻）

十日、辛巳、未剋、若宮鳥居南脇并三十八所ノ鳥居ノ南脇ニ羽蟻出現、近來ハ不_レ及_二言上_一也、仍私_二晴氏_一相尋之処、占文如此、

両所羽蟻事、以_二昨日未時_一推_レ之、自然之所_レ致候歟、無_二殊咎崇_一候、不_レ可_レ被_二驚思食_一候、兼又可_レ令_レ立_二御堂廊_一給上日時事、以_二別紙_一令_レ勘_二申_一之候、今月中此外吉日不_レ候歟、恐々謹言

四月十一日

晴氏

端書

昨日御報之時、依_二急事_一罷出事候之間、即時不_レ申_二返事_一候、尤為_レ恐候、尚々羽蟻事御吉事ハ候とも不_レ可_レ有_二凶事_一候也、

史料9からさかのぼること七年前の弘安三年四月十日、若宮の鳥居に羽蟻が出現した。この時、若宮神主中臣祐賢は南都陰陽師安倍晴氏に「私ニ」尋ね、占文を得ている。占文の結果、吉事であり凶事ではないと占断されたため、京へは注進しなかった。注目したいのは傍線部の「近來ハ不及言上也、仍私ニ晴氏ニ相尋之処」である。すなわち、近年ではすべての怪異を氏長者へ注進せず、神主の判断で南都陰陽師に諮るケースもあったのである。それでは史料9ではなぜ氏長者へ報告して対処を仰いだのだろうか。その理由を示唆するのが次の史料である。

〔史料11〕『中臣祐賢記』弘安三年（二二八〇）八月三日条（『春日社記録』3巻）

三日、申剋、五所之御宝殿ニ等、銀花開之由、神人令_レ申之間、令_二実檢_一之処、数十本之間、銀実非依_二難_一治定_一、先以_二三方神人_一一件花ヲ小土器ニ入天、晴氏・資朝等ニ令_レ見之処、晴氏ハ花之由申_レ之、資朝ハ非_レ花之由申_レ之、依_レ之猶依_二難散_一不審、次日_{四日}、朝、神主之代官_{兼時}・祐賢代官_{祐春}参_上、此次第ヲ令_二申入_一之処、被_二仰出_一云、花歟非_レ花事ハ、件花ヲ鏡ノ上ニ置天、以_レ刀切之仁、件花ハ不_レ切之由被_二仰出_一之間、帰_二参社頭_一、致_二此沙汰_一之処、則

切畢、仍不_レ能_レ言_二上殿下_一也、且為_二後代不審_一、今度花員数在所注_レ之、

注進 御宝殿銀花開事（但於_二今度_一者、非_レ花之由事切了）

（中略） *場所、本数を書き上げ）

右注進如_レ件、

弘安三年八月三日（但、此注文不_レ及_二言上_一 殿下_一也、寺家へハ進了、但進了）

（中略） *長承二年、安元二年、天福元年の先例を引用）

鏡面ニ天切_レ候由、神主申_二入_一 寺家_一之処、御返事如_レ此、

銀花否事、以_二此旨_一申入候了、鏡面ニも生事候歟、被_レ伐歟否事、御不審許_二候、於_二事之次第_一者、早可_レ被_二注進_一歟之由、被_二仰下_一候、仍執達如_レ件、

八月四日

有舜

（中略）

依_レ之神主同四日、言_二上_一 殿下_一云々、仍祐賢も同五日言上了、銀花在所ハ若宮御方分ハカリ書拔テ注進了

（中略）

一今日披露御占形

春日社司言上怪異吉凶（若宮宝殿并小社等銀花開、今月三日申時見付）

占、今月三日壬申時加申七月節

太一臨_レ申為_レ用、将天一、

中_二功曹六合_一、終_二微明天空_一、御行年牛上大衝朱雀、

卦遇元首玄胎四牝、

推_レ之、依_二神事違例_一不淨所_レ致之上、可_レ聞_二食口舌闕諍_一事歟、期彼日以後四十日内、及明年四月・七月節中並戊巳日也、至_レ期被_二忌諱_一無_二其咎_一乎、

弘安三年八月十六日

大献物安倍泰統

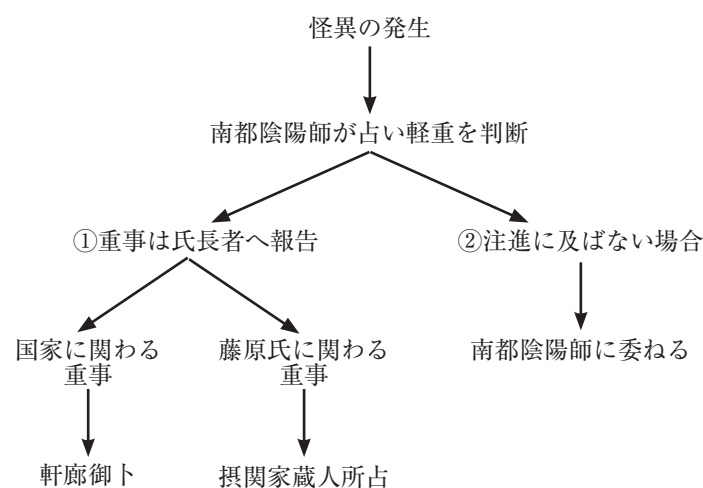


図2 南都における怪异と占い

主税助賀茂在右

大舍人頭安倍朝臣有光

史料10と同年の弘安三年八月三日、五所宝殿に銀花（ウスバカゲロウ）数十本が出来た。神人が見たところ判断がつかなかったため小土器に入れ、南都陰陽師安倍晴氏・資朝がこれを実検したところ、晴氏は花、資朝は花に非ずと両者の判断が分かれた。さらに彼らは銀花を鏡の上に置いて刀で切ったところ切れたので銀花ではないとし、氏長者へ報告する必要があると申し述べた。しかし、今度は寺方より不審ありとの意見が出されたため、京に注進することとなった。その結果、摂関家蔵人所占が行われ、安倍有光以下二名の連署の占形が春日社に到来し、「口舌

闘諍」との結果が示されたのである。

すなわち、春日社で発生した怪异については、まず南都陰陽師が実検や占いを行い、その結果、怪异ではない、あるいは吉事（凶事ではない）と判断された場合は、そのままとするが、南都陰陽師の間で判断が分かれたり、寺家や他家から異論が出た場合は、氏長者に注進してその判断を仰ぐようになったのである。他にも正応三年（一二九〇）五月一日に拝殿の柱に銀花らしきものが発見されたとき、南都陰陽師安倍資朝が実検して、銀花ではないと判断したため、京へは注進しなかった。¹⁷

このように十三世紀後半を画期として春日社や興福寺では日次勘申や怪异占の一部を南都陰陽師に委ねるようになったことがわかる。日次勘申では氏長者の判断を仰ぐ必要のないケース、興福寺学侶方や春日社社司で対処可能な案件は南都陰陽師が日次勘文を献じるようになる。また、怪异占では怪异の軽重を南都陰陽師に判断させ、その結果によって氏長者に注進するようなルーティンが採られるようになる。これを図化すると図2のようになる。

また、こうした動向は十三世紀後半ごろから京へ注進することが減り、南都で判断されることが多くなっていたことが確認できる。これは春日社若宮神主中臣祐賢の「近來ハ不及言上也」（史料10）との文言に見られるように、摂関家側からの要請というよりは南都側の主体的な選択の結果であったと考えられよう。

（四）南都陰陽師が勘申・占断する背景

こうした変化の背景や要因については以下のことが考えられる。まず、春日社や興福寺で処理すべき案件が増加し、一つ一つ氏長者への報告と指示を仰ぐ時間的余裕がなくなってきたからだろう。むしろ、重事については氏長者の決を仰がねばならないが、日常的に発生する軽微な事案については自律的に判断するようになったと考えられる。さらに藤

原氏と興福寺・春日社との関係も影響していると思われる。中世の興福寺と藤原氏長者との関係について高山京子氏は院政期以降、摂関家の権力低下により、興福寺側が藤原氏長者に従わない事態が頻出するようになることを指摘する〔高山二〇一〇〕。また、摂関家は院政期以降、治天の君からの圧力や氏族内の競合により、弱体化していった過程は夙に知られている〔樋口二〇一八〕。むしろ興福寺別当や春日社司などの人事に対しては依然として長者宣は効力を持っていたが、こうした摂関家をめぐる政治的環境の変化によって、相対的に南都側による内部案件の裁量権が拡大していったのである。その際に必要となったのが日次や怪異の吉凶を読み解く存在、すなわち陰陽師であった。これらの要因によって陰陽師が南都に常駐する必要性が出てきたのである。

このような寺社権門たる春日社・興福寺に定住して奉仕する陰陽師の存在形態は鎌倉陰陽師と類似する。鎌倉にも多数の陰陽師が下向するが、彼らは身分的には官人陰陽師でありながら、鎌倉幕府専従の陰陽師として数世代にわたり定住した。南都に官人陰陽師が定住したのも興福寺・春日社が摂関家の氏寺・氏社という寺社権門だったからではないだろうか。さらに定住した陰陽師をみると、南都にせよ鎌倉にせよ、いずれも安倍氏の庶流が中心であったことは果たして偶然なのだろうか。¹⁸当該期の陰陽道宗家は周知の通り賀茂氏と安倍氏であったが、始祖晴明が賀茂氏の弟子であった安倍氏にとって賀茂氏は越えることができない大きな壁であった。安倍氏庶流の南都定住は鎌倉期の賀茂氏と安倍氏、また安倍氏内における陰陽道の主導権をめぐる動向の一端としても理解できさるだろう。

おわりに

それでは本稿で明らかにしたことをまとめておこう。

まず、遅くとも十三世紀前半には南都陰陽師が定住していたことを確認した。彼らは春日社若宮神主中臣氏の記録に「寺住陰陽師」と表現されていることから、興福寺および春日社に定住し、南都を拠点に活動する陰陽師と認識されていた。彼らには二つの系統が存在し、一つは安倍泰親流弘継の系統、もう一つは安倍晴道党晴泰の系統であった。いずれも数代にわたって定住したが、晴泰の系統は十四世紀以降は確認できなくなる。一方、弘継の系統は十五世紀まで継続して確認でき、幸徳井家へと続くと思われる。ちなみに鎌倉に定住した鎌倉陰陽師もほとんどが安倍氏であり、賀茂氏はごくわずかである。南都といい、鎌倉といい、地方に拠点を移して基盤を整えるのは、京では賀茂氏の下風に立つ鎌倉期安倍氏の特徴と言えそうである。

中世前期の南都陰陽師は春日社および興福寺において、日次勘申、占術、呪術を行っていた。ただし、そのすべてを取り扱うのではなく、国家公事や藤原氏氏長者に関係する日次勘申は在京の官人陰陽師が担い、南都陰陽師は内部事案の日次勘申や神域内・境内の不浄祓を扱った。また怪異が発生した際、軽事は南都陰陽師、重事は京へ注進するといった分業体制が十三世紀後半あたりからとられるようになり、軽重の判断そのものも少なからず南都陰陽師に委ねられるようになっていった。

中世前期の南都陰陽師と門跡との関係は史料上の制約もあり確認することができなかった。とはいえ、十五世紀以降見られる幸徳井家と大乗院門跡との密接な関係は、十三世紀以来、継続されてきた安倍弘継系陰陽師との関係を前提とすると見て大過ないだろう。幸徳井友幸は尋尊にとって「宿老慇懃者」¹⁹と称されるほど緊密な存在であったが、それは十三世紀以来南都に定住するという歴史的前提なくして築かれるものではなかったといえるだろう。このように地域の権門寺社に定住して活動する存在として他にも宇佐の陰陽師がいる。地域社会を拠点に陰陽道的知の集積や発信の役割を担う存在を筆者は以前「地域陰陽師」と定義し

たが〔赤澤二〇二a〕、これはいわゆる「民間陰陽師」をも包摂する概念であり、南都陰陽師や宇佐の陰陽師は「地域の権門寺社周辺に定住して寺社に奉仕する存在」であることから「権門陰陽師」といった枠組みで括することも可能であろう。

さて、最後に幸徳井家の祖安倍弘継系陰陽師の出自について推論を提示しておきたい。弘継系陰陽師は唯一「陰陽家系図」（宮内庁書陵部所蔵）にのみ見られるが、その傍注には明らかな事実誤認が複数認められることはすでに指摘した通りである。弘継の曾孫にあたる時資を「安倍」と明記した史料は確認できないが、資朝は文永年間の勘文（史料4・5）で安倍資朝と署名していることから十三世紀後半の段階では安倍氏を名乗っていたことは疑いない。しかし、彼らは当初から安倍氏に連なる者たちだったのだろうか。『尊卑分脈』や『医陰系図』といった諸系図に一切見当たらないことに鑑みれば、「陰陽家系図」は後代の幸徳井家が自家の由緒を形成するために作為を施したものである可能性が高いのではないだろうか。それではなぜそのような必要があったのか。それは幸徳井家の祖弘継は賀茂でも安倍でもない氏族の出身だったからではないだろうか。その傍証となるのが吉川家文書「陰陽雜書写（原題…方位・日時吉凶等占関係事写本）」（占―二五）である。本史料は賀茂家榮撰の『陰陽雜書』の写本であるが、その奥書に「書本云ク／喜（嘉カ）祿三年四月廿四日午剋頭秘読書寫畢／惟宗弘継在判」と記載されている。まず嘉祿三年（一二二七）という年代は「陰陽家系図」上の時期と合致する。弘継は安倍季尚、泰継の兄弟とされているが、季尚は寛元元年（一二四三）に死去した同系統の当主であり、泰継も寛喜三年（一二三二）から活動が見えられ、弘継と同世代に当たるので年代は整合する。ただし、その場合、弘継とその曾孫と位置づけられる時資の活動時期が重なってしまう問題が生じるが、そもそも系図上の時資の位置が不自然であるため、再考しなおす必要がある。そして本史料で弘継が名乗る惟宗氏は

賀茂・安倍氏が陰陽道を掌握する十世紀以前から陰陽師を多数輩出する氏族であり、陰陽頭に就く者もいた名家であった。賀茂・安倍が陰陽道を掌握してからは劣勢に立ちつつも鎌倉期を通して依然として多くの陰陽師を出し、その中には鎌倉陰陽師の中核を担う文元なども見られる。文元以外は賀茂・安倍氏の門弟となる者が多かったとはいえず、技能系官人には高い能力を持つ門弟を養子や猶子にすることは珍しいことではなかった。弘継も自発的か誘われてかは不明だが、安倍氏の猶子あるいは養子となり、安倍に改姓した可能性はあるのではないだろうか。

註

〔1〕「幸徳井家系図」（鈴木叢書）七、東大史料編纂所架蔵謄写本二〇〇一ノ七ノ七、木村著書五六八ノ九頁。

〔2〕賀茂定弘の活動は以下のようなものが確認できる。永和三年（一二七七）、四年、応永十七年（一四一〇）二十年の暦跋に署名（厚谷二〇〇八）。康暦三年（二三八二）二月七日、永徳元年（一三八二）の辛酉革命勘文に署名（「革暦類」）。応永八年（一四〇二）八月三日、内裏の造営始めの連署日時勘文に署名（「迎陽記」）。また、定弘の位職については、「陰陽家系図」の傍注に「三位、刑部卿、陰陽助」、「医陰系図」の傍注に「彈正少弼、從四上、陰陽助」とあるが、一次史料での極位は正四位下（応永十九年暦跋）が確認できる。

〔3〕『経覚私要鈔』永享八年十月二十九日条で経覚が友幸に撫物を遣わす記事がみえるので、遅くともこの時までには南都に帰住していたものと思われる。

〔4〕『奈良坊目拙解』巻七「幸下之町項」、「野田山上村項」（村井古道、享保二十年、天理大学附属図書館、東大史料編纂所架蔵謄写本二〇四一・六五ノ一二七ノ七ノ三）

〔5〕壬生本「陰陽家系図」（宮内庁書陵部所蔵（請求記号止5・20））。なお、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースにて画像が公開されており、木村（二〇一二）にも翻刻が掲載されている。

〔6〕『経覚私要鈔』宝徳二年（一四五〇）四月七日条、康正二年（一四五六）正月十一日条。

〔7〕前掲註5。

〔8〕ただし、時資については他の史料で陰陽助に任官していたことが確認できず、かつ寛喜四年五月まで陰陽助は賀茂在継であったことが確認できることから史

料2の陰陽助は誤記である可能性が高い。

(9) 晴綱は九条兼実の六月祓や奉幣前の祓を務めていたことが確認できる(『玉葉』治承三年六月二十九日条、文治二年五月十七日条など)。

(10) 弘安八年(一二八五)三月四日付「陰陽寮申文」(『勘仲記』弘安九年春巻紙背文書。『鎌倉遺文』一五四五五号)。

(11) 泰親の子はこの他にも泰成や親長などがあるが、主流はこの三人である。

(12) 一次史料に確認できる安倍親宣の活動時期は一二一五～七九年、泰世は一二一四～九四年である(『赤澤二〇一一、五五頁』)。

(13) 傍注の文字自体は明らかに「長久元年」であるが、承久元年(一二一九)の誤写の可能性もある。

(14) なお、宇佐の陰陽師も宇佐社の門前に邸宅を持っていた(『赤澤二〇一一a』)。

(15) 例えば、『中右記』長承四年(一一三五)二月二十日には神主を所望する者が五、六名いたため占いによって決めたという。また、『台記』仁平三年(一二五三)七月四日条には占文も載せられている。

(16) 『玉葉』治承五年(一一八二)六月十二日条。

(17) 『中臣祐春記』正応三年(一二九〇)五月一日条(『春日社記録』3巻)。表2参照。

(18) 鎌倉には若干の賀茂氏が認められるが七十四人中わずか四名である(『赤澤二〇一一』)。

(19) 『大乘院寺社雑事記』文正元年(一四六六)十二月二日条。

(20) 『百鍊抄』寛元元年(一二四三)五月三十日条。

(21) 『民経記』寛喜三年(一二三三)四月十四日条。

引用文献

赤澤春彦(二〇一一)『鎌倉期官人陰陽師の研究』吉川弘文館

赤澤春彦(二〇二一a)「宇佐の陰陽師」(『赤澤編』『新陰陽道叢書 第二巻中世』名著出版)

赤澤春彦(二〇二一b)「鎌倉幕府と怪異―『吾妻鏡』の怪異を読む」(『東アジア怪異学会編』『怪異学講義―王権・信仰・いとなみ』勉誠出版)

厚谷和雄(二〇〇八)『具注暦を中心とする暦史料の集成とその史料学的研究 二〇〇六～二〇〇七年度科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書』課題番号18520487

木村純子(二〇〇二)「中世興福寺と幸徳井家」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』九、後に『室町時代の陰陽道と寺院社会』に加筆修正して収録)

木村純子(二〇〇六)「大乘院尋尊と幸徳井家」(『古文書研究』六二)

木村純子(二〇一二)『室町時代の陰陽道と寺院社会』勉誠出版

高山京子(二〇一〇)『中世興福寺の門跡』勉誠出版

西岡芳文(二〇〇二)「六壬式占と軒廊御卜」(今谷明編『王権と神祇』思文閣出版。後に『新陰陽道叢書 第二巻中世』に再録)

林 淳(二〇〇二)「幸徳井家と南都陰陽道」(中尾堯編『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館。後に林『近世陰陽道の研究』吉川弘文館、二〇〇五年に収録)

樋口健太郎(二〇一八)『中世王権の形成と撰閥家』吉川弘文館

柳原敏昭(二九八八)「室町政権と陰陽道」(『歴史』七一、後に『陰陽道叢書2中世』名著出版、一九九三年に再録)

吉田栄治郎(一九九二)「近世大和の陰陽師と奈良暦」(『陰陽道叢書3近世』名著出版) 渡辺敏夫(一九七六)『日本の暦』雄山閣

(撰南大学国際学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇二二年一月二日受付、二〇二三年三月三十一日審査終了)

Relationship between Kasuga Shrine/Kofuku-ji Temple and Nanto Onmyoji in the Early Middle Ages of Japan

AKAZAWA Haruhiko

This paper examines Nanto Onmyoji in the early Middle Ages of Japan. It is well known that the Kotokui family, a branch of the Kamo clan, settled in Nara from the late medieval period to the early modern period. After Tomoyuki I, this family was promoted to third rank by forming a close relationship with Daijo-in Monzeki. After the discontinuation of the Kadenokoji family, the main line of the Kamo clan, he became a representative of the Kamo clan. However, the origin of Nanto Onmyoji was not the Kotokui family. Already at the stage of the 13th century, Abe Tokisuke and Haruyasu, Abe's branch-school onmyoji, can be confirmed as 'Terazumi Onmyoji' of Kofukuji. They lived in Nara, performed fortune-telling and sorcery on the monsters that occurred at Kofuku-ji Temple and Kasuga-jinja Shrine, and chose the day of creation. However, it did not cover everything. Onmyoji, a bureaucrat living in Kyoto, conducted daily kanshin on national events and the head of the Fujiwara clan, while Nanto Onmyoji dealt with internal problems of temples and shrines. In the event of an apparition, the Nanto Onmyoji would foretell fortunes for light problems, and if it was judged to be a serious one, they would be sent to Kyoto. In this way, a system of division of labor was adopted. Kofuku-ji Temple and Kasuga-jinja Shrine had onmyoji settled nearby. This is because they wanted to quickly deal with frequent occurrences of apparitions and fragmented activities within temples and shrines. Nanto Onmyoji that appeared in the 13th century has two lines. One is the lineage of Hareyasu and Hareuji of the Harumichi party, a branch of the Abe clan, and the other is the lineage of Tokisuke and Suketomo, who separated from the Yasuchika line of the Abe clan. However, there is one caveat. The former can be confirmed in multiple genealogies. On the other hand, the latter can only be confirmed in the 'Onmyouka-Keizu' (Kunaityou-Syoryoubu). This genealogy also states that Tokisuke was the ancestor of Tomoyuki KOTOKUI. However, there are clear factual errors in the content. Therefore, it would be appropriate to judge it as an act of posterity. Furthermore, it can be inferred from the Yoshikawa family document 'Onmyou-Zassyo' (National Museum of Japanese History) that the original surname of Tokisuke's ancestor was the Koremune clan. The Kotokui family was originally the Koremune clan, took the name Abe clan in the 13th century, and changed their name to the Kamo clan in the 15th century. In this way, the Kotokui family was based on the existence of the Nanto Onmyoji of the 13th century.

Key words: Nanto Onmyoji, Kasuga Shrine, Kofuku-ji Temple, regent family, Kotokui family, Abe harumichi party
